

「研究論文」

東京書籍版『新編 新しい社会 歴史』の単元「ギリシャ・ローマの文明」の中の彫刻の例示に関する一考察

堀井 健一（長崎大学教育学部）

はじめに

東京書籍の中学校社会科歴史分野の教科書がこの度改訂され、『新編 新しい社会 歴史』¹⁾とその書名が変更され、2016年度から使用され始めた。その改訂版の教科書の中に単元「ギリシャ・ローマ文明」（28－29頁）が新たに登場した。「ギリシャ・ローマ文明」に関連するものについては改訂前の旧版の『新しい社会 歴史』²⁾では「深めよう ヨーロッパの古代文明とイスラム教」という発展学習的な場の中で「ギリシャの民主政」「ヘレニズム」「ローマ帝国」「キリスト教の広がり」（最後に「イスラム教の広がり」）という小見出しの下に記載内容が存在していたところではあるが、今回の改訂版ではそれが授業の中で必ず取り上げられる単元の地位にいわば昇格したわけである。それゆえ、この単元の内容については改めて現場の中学校の社会科教師の教材研究の一助になるものが求められるところではなかろうか。

他方、筆者は2002年の10－12月に文部科学省在外研究員（短期）の制度を利用してイギリスのオクスフォード大学で研究を行なう機会を得た時に、教育学部の教員の立場からその地の書店でイギリスの学校教員向けの学校教育用書籍を手にとってそれに興味を抱いてその場で数冊購入したり、帰国後に関連書籍を購入するうちにイギリスの歴史教育とそのカリキュラムに関心を持った。そのせいもあって筆者は、2009年の教員免許状更新講習の始まりからイギリスの歴史教育の教材と歴史教育カリキュラムを受講者に紹介することを行なってきた。筆者は本来、中学校教育コース社会専攻の学生に教科専門の立場から外国史を教えるのが務めであったので、以前は社会科教育法には縁がなかったが、前述のような経緯からイギリスの歴史教育のカリキュラムについてある程度の知見を得ることとなった。

そこでイギリスの歴史教育のカリキュラムについてその特徴の一部を述べてみよう。例えば2007年のイギリスのナショナル・カリキュラムのうちの**History: Programme of study for key stage 3 and attainment target**という題目の文書が手元にあるが、これは**key stage 3**という日本の中学校に相当する学年の生徒向けの歴史教育に関するものである。そのイギリスの歴史教育のカリキュラムの中では「**1 Key concepts**（コンセプトの要点）」の中の「**1.1 Chronological understanding**（年代の理解）」ではaからcまでの3点について記述があるが、そのうちのbは「**Developing a sense of period through describing and analysing the relationships between the characteristic features of periods and**

societies (いくつかの時代や社会に特有の諸特徴の間の関係を述べたり分析したりすることを通して時代を読み取る感覚を育てる)」とある³⁾。ここで筆者が目したいことは、イギリスのカリキュラムでは教師が生徒をして述べさせたり分析させたりする対象が時代や社会のそれぞれの特徴とされるものの中に存在するであろう関連性であることである。その時代や社会に特有の諸特徴を見極めてそれらの関連性を探求する手法は、その時代や社会と生徒の暮らす現代の社会とを比較・対照させさせる試みに自然とつながってくるのではなかろうか。他方、わが国の中学校社会科歴史的分野の学習指導要領の中では歴史的分野の「1 目標」の中の「(1)」の中で「我が国の歴史の大きな流れを(中略)各時代の特色を踏まえて理解させ」と、そして「2 内容」の中の「(1)歴史のとらえ方」の中の「ウ」の中で「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえさせる。」とされている⁴⁾。それゆえ、わが国の学習指導要領においては、イギリスの歴史カリキュラムの中に見られるように、生徒によってとらえられた、時代の諸特色の間の関係を述べたり分析したりすることに至る必要はないように見受けられる⁵⁾。それに対して、管見の限りで、少量ながら手元にあるイギリスの歴史教材を閲覧するならば、特にkey stage 2という初等教育の中・高学年向けのものに多く見られるが、例えば、ヴィクトリア女王時代の学校の教具・備品を提示して当時の昔の学校と今の学校との比較・対照を題材に取り上げたものがある⁶⁾。かかる題材は、教わる生徒にとって時には複数の時代・社会の間の比較・対照から各々の時代・社会の特徴的な点を見出す一助となるであろうし、またそれを通して現代という時代・社会の特徴的な点を見出すことにもつながるのではなかろうか。それゆえ、わが国の歴史教育の中でも今後はかかる時代・社会の諸特徴の間の比較・対照という歴史の見方を生かすことが求められるのではなかろうか。

さて、東京書籍版『新編 新しい社会 歴史』の教科書に関する叙述に戻ると、その書の中の「ギリシャ・ローマ文明」の単元ページを一瞥して発表者がまず疑問に抱いたことには2点ある。1点目は、中学校の「ギリシャ・ローマ文明」の単元で扱われる内容が高校の世界史の内容のいわば縮刷版でよいのかどうかという問題である。2点目は、ヘレニズム時代の彫刻作品として傑作とされている「ミロのビーナス」の写真(29頁)が掲載されているが、これがはたして当該の中学校社会科歴史的分野の教科書にとって適切であるのかという問題である。

上記の疑問の1点目については以下でそれについて考察するが、結論を先取りすれば、その考察によって東京書籍版『新編 新しい社会 歴史』の教科書の「ギリシャ・ローマ文明」の単元の中の記述内容の中にギリシャ文化の東漸に関する記述という秀逸な独自性が明らかになる。それゆえ、その「ギリシャ文化の東漸」の例としてその教科書の中で挙げられている「ミロのビーナス」像がそれ自体重要性を増してくるものとなろう。それゆえ、そのことは、次の疑問の2点目を考察することの重要性を指摘するものとなる。以下で上記の疑問の2点を考

察してみよう。

I 中学校の「ギリシャ・ローマ文明」の学習内容は高校世界史の縮刷版でよいのか

疑問の1点目は，中学校の「ギリシャ・ローマ文明」の単元で扱われる内容が高校の世界史の内容のいわば縮刷版でよいのかどうかという問題である。

ここで山川出版社の高校世界史の教科書『詳説 世界史B』⁷⁾の「第1章 オリエントと地中海世界」の中の「2 ギリシア世界」と「3 ローマ世界」の中から本文の太字の重要歴史用語と図・写真・表を拾い出して列挙して表にまとめてみよう。

表1 『詳説 世界史B』の重要歴史用語・図・写真等

太字の重要歴史用語	図・写真・表
2 ギリシア世界 (27-40頁)	
地中海世界の風土と人々 (27-28頁)	
果樹栽培, 牧畜, ギリシア人, 古代イタリア人	地図「ギリシア人の世界」
エーゲ文明 (28-29頁)	
エーゲ文明, クレタ文明, クノッソス, ミケーネ文明, ミケーネ, トロイア, 貢納王政, 暗黒時代	写真「ミケーネ城塞の獅子門」
ポリスの成立と発展 (29-30頁)	
アクロポリス, 集住, ポリス, 植民市, ヘレネス, バルバロイ	図「アテネの市街図」
市民と奴隸 (30-31頁)	
市民, 奴隸, アクロポリス, アゴラ	
アテネとスパルタ (31頁)	
奴隸制度, アテネ, スパルタ, ヘイロータイ, ペリオイコイ	写真と図「ギリシアの重装歩兵」
民主政への歩み (32頁)	
重装歩兵部隊, アテネ, ソロン, 僭主政治, ペイシストラトス, クレイステネス, 陶片追放	写真「オストラコン」
ペルシア戦争とアテネ民主政 (33-34頁)	
ペルシア戦争, テミストクレス, デロス同盟, ペリクレス, 民会, 直接民主政	地図「ペルシア戦争」, 図「三段櫓船」, 写真「アテネ民会議場の演壇」

ポリスの変容 (34-35頁)	
ペロポネソス戦争, テーベ, 傭兵, マケドニア, フィリッポス2世	
ヘレニズム時代 (35-36頁)	
アレクサンドロス大王, 東方遠征, アンティゴノス朝マケドニア, セレウコス朝シリア, プトレマイオス朝エジプト, ヘレニズム時代, アレクサンドリア	写真「イッソスの戦い」, 地図「アレクサンドロスの帝国とヘレニズム時代の3王国」
ギリシアの生活と文化 (36-40頁)	
オリンポス12神, ホメロス, ヘシオドス, イオニア自然哲学, タレス, ピタゴラス, アイスキュロス, ソフォクレス, エウリピデス, アリストファネス, ソフィスト, ソクラテス, プラトン, アリストテレス, ヘロドトス, トウキディデス, パルテノン神殿, フェイディアス, ヘレニズム文化, 世界市民主義, エピクロス派, ストア派, エウクレイデス, アルキメデス, ムセイオン	写真「ギリシアの劇場」, 写真「パルテノン神殿」, 図「ギリシア建築の柱の3様式」, 写真「パルテノン神殿のフリーズ彫刻」, 写真「ミロのヴィーナス」, 表「ギリシア文化一覧表」
3 ローマ世界 (40-51頁)	
ローマ共和政 (40-41頁)	
ラテン人, ローマ, エトルリア人, 共和政, 貴族, 平民, コンスル, 元老院, 護民官, 平民会, 十二表法, リキニウス・セクスティウス法, ホルテンシウス法, 独裁官	地図「ローマによるイタリア半島の統一」
地中海征服とその影響 (41-42頁)	
分割統治, カルタゴ, ポエニ戦争, ハンニバル, 属州, ラティフンディア, 閥族派, 平民派	写真「アッピア街道」
内乱の1世紀 (42-44頁)	
グラックス兄弟, スパルタクス, ポンペイウス, カエサル, クラッスス, 三頭政治, アントニウス, レピドゥス, オクタウィアヌス, クレオパトラ, ア	写真「剣闘士」

クティウムの海戦	
ローマ帝国 (44頁)	
アウグストゥス, 帝政時代, 元首政, ローマの平和, 五賢帝, トラヤヌス帝, ローマ市民権	写真「アウグステゥス帝の像」, 地図「ローマ帝国の最大領域」
3世紀の危機 (45頁)	
マルクス=アウレリウス=アントニヌス帝, 軍人皇帝の時代, コロヌス, コロナトゥス	
西ローマ帝国の滅亡 (45-47頁)	
ディオクレティアヌス帝, 専制君主政, コンスタンティヌス帝, コンスタンティノーブル, ゲルマン人の大移動, テオドシウス帝, 東ローマ帝国, 西ローマ帝国	写真「コンスタンティヌス帝の像」, 写真「四帝分治制を記念する彫像」
キリスト教の成立 (47頁)	
ユダヤ教, イエス, キリスト, キリスト教, ペテロ, パウロ, 使徒, 新約聖書	
迫害から国教化へ (47-48頁)	
ミラノ勅令, ニケーア公会議, アタナシウス派, アリウス派, 三位一体説, エフェソス公会議, ネストリウス派	写真「カタコンベの壁画」
ローマの生活と文化 (49-51頁)	
ラテン語, コロッセウム, ローマ法, 万民法, ローマ法大全, ユリウス暦, ウェルギリウス, キケロ, リウイウス, タキトゥス, プルタルコス, プトレマイオス, アウグスティヌス	写真「ローマ時代の水道橋」, 写真「コロッセウム」, 写真「コンスタンティヌス帝の凱旋門」, 表「ローマ文化一覧表」

次に、東京書籍の中学校社会科の教科書『新編 新しい社会 歴史』の「4 ギリシャ・ローマの文明」の中から本文の太字の重要歴史用語と図・写真等を拾い出して列挙してみよう。

表2 『新編 新しい社会 歴史』の重要歴史用語・図・写真等

太字の重要歴史用語	図・写真・表
4 ギリシャ・ローマの文明 (28-30頁)	

ギリシャの都市国家 (28頁)	
アテネ, ポリス, ギリシャ文明	地図「㊶古代ギリシャ人の交易活動」, 写真「㊷パルテノン神殿」, 写真「㊸古代ギリシャの壺にえがかれた唐草模様」, コラム「歴史にアクセス 古代のオリンピック」, 写真「㊹円盤投げがえがかれた古代ギリシャの陶器」 ⁸⁾ (コラム内)
ヘレニズム (28-29頁)	
アレクサンドロス大王, ヘレニズム	写真「㊺ミロのビーナス」, 写真「㊻アレクサンドロス大王」, 写真「㊼ガンダーラで出土した仏像」
ローマ帝国 (29頁)	
	地図「㊽古代ローマの支配領域の拡大」, 写真「㊾古代ローマの水道橋」, 写真「㊿コロッセオ」, 写真「㊽インドで発見された古代ローマの貨幣」

次に、東京書籍の中学校社会科の教科書『新編 新しい社会 歴史』の「4 ギリシャ・ローマの文明」の単元と山川出版社の高校世界史の教科書『詳説 世界史B』の「第1章 オリентと地中海世界」の中の「2 ギリシア世界」と「3 ローマ世界」の内容との間で比較するために、上記の表2を元にして加筆・修正する形で、重要歴史用語については後者の書の本文の中で太字で記載された重要歴史用語が前者の書の本文にも記載がある場合にはそれを拾い上げて加筆し（その中で前者の書の中で太字の重要歴史用語であった場合には太字で示し）、さらに両書の間で太字の重要歴史用語として重複して登場するものは斜体で表記し、また図・写真・表については後者の書の中に盛り込まれた図・写真等が前者の書の中にも盛り込まれているものを同様に斜体で表記した表を作成してみよう。

表3 『新編 新しい社会 歴史』と『詳説 世界史B』の比較

重要歴史用語	図・写真・表
4 ギリシャ・ローマの文明 (28-30頁)	
ギリシャの都市国家 (28頁)	
牧畜, アテネ , スパルタ , ポリス , 奴隷, 市民, 民会, 民主的な政治, ギリシャ文明	地図「㊶古代ギリシャ人の交易活動」, 写真「㊷パルテノン神殿」, 写真「㊸古代ギリシャの壺にえがかれた唐

	草模様」，コラム「歴史にアクセス 古代のオリンピック」，写真「㊦円盤 投げがえがかれた古代ギリシャの陶 器」(コラム内)
ヘレニズム (28-29頁)	
マケドニア，アレクサンドロス大王， ヘレニズム	写真「㊦ミロのビーナス」，写真「㊦ アレクサンドロス大王」，写真「㊦ガ ンダーラで出土した仏像」
ローマ帝国 (29頁)	
ラテン人，ローマ，共和制，帝政， (ローマの法律)，([ローマの] 暦)， 東ローマ帝国，西ローマ帝国	地図「㊦古代ローマの支配領域の拡大」， 写真「㊦古代ローマの水道橋」， 写真「㊦コロッセオ」，写真「㊦イン ドで発見された古代ローマの貨幣」

表3の『新編 新しい社会 歴史』と『詳説 世界史B』の内容の比較からいえることは、(1)本文の中の重要歴史用語の場合はほとんど両書の間で重複をすること、(2)図・写真等でも両書の間で重複するものが過半を占めることである。

特に図・写真等の場合、東京書籍の中学校社会科の教科書『新編 新しい社会 歴史』の中に収録されている図・写真等の11点のうち地図「㊦古代ギリシャ人の交易活動」、写真「㊦パルテノン神殿」、写真「㊦ミロのビーナス」⁹⁾、写真「㊦アレクサンドロス大王」、地図「㊦古代ローマの支配領域の拡大」、写真「㊦古代ローマの水道橋」、写真「㊦コロッセオ」が山川出版社の高校世界史の教科書『詳説 世界史B』の中でも収録されている。しかも写真では「㊦ミロのビーナス」は撮影角度が少し異なるものの全身像撮影であることからほぼ同じもの、「㊦アレクサンドロス大王」は東京書籍のものが山川出版社のものほんの一部を収録したものとはいえ同じポンペイの床モザイクからのもの、「㊦古代ローマの水道橋」は同じ部位を撮影したものであって撮影時期が違うだけで撮影角度がほぼ同じもの、「㊦コロッセオ」が同じものを上空から別の角度から撮影したものが使われているだけのことであり、両書の間でほぼ同じものを扱っていると言ってよい。

それゆえ、中学校の東京書籍版『新編 新しい社会 歴史』の中の「ギリシャ・ローマ文明」の単元で扱われる内容が高校の山川出版社の世界史の教科書『詳説 世界史B』の内容と多くの点で重複していることが分かる。それゆえ中学校の東京書籍版『新編 新しい社会 歴史』が中学生のその後の進学先の高校の世界史Bのいわば準備をする役割を兼ねていると、そして前者の書が後者の書のいわば縮刷版であるといえるかもしれない。

ここまでの東京書籍版中学校の教科書と山川出版社版高校世界史の教科書の内容の比較の考察から前者の書が後者の書のいわば縮刷版である可能性が大である

ことを指摘した。だが、この指摘の点は、それだからこそ、東京書籍版中学校の教科書が記載しているのに対して山川出版社版高校世界史の教科書が記載していない内容が東京書籍版中学校の教科書の記述の特異性ないしは殊勝な点とはいえないか。それを拾い上げるならば、次の3点が挙げらる。すなわち、(1)コラム「歴史にアクセス 古代のオリンピック」に見られる古代オリュンピアの祭典についての記述と、(2)写真「㊦ガンダーラで出土した仏像」に見られる彫刻制作技術・意匠の東漸と、(3)写真「㊧インドで発見された古代ローマの貨幣」に見られる古代ローマ時代のアジアとの交易活動である。とりわけ(2)の点は、それを説明するために写真「㊨ミロのビーナス」、アレクサンドロス大王の東方遠征（写真「㊩アレクサンドロス大王」を含む）、写真「㊦ガンダーラで出土した仏像」が使われ、また本文の中では「ヘレニズムの文化は、後にインド、中国、日本の美術にも影響をあたえました」（29頁）と記載されている。この写真「㊦ガンダーラで出土した仏像」については東京書籍の『新編 新しい社会 歴史 教師用指導書 指導展開編』の中で「資料解説」として次のように解説されている。

㊦ガンダーラで出土した仏像

ガンダーラ地方とはインダス川上流の地域のことであり、アレクサンドロス大王の遠征によって、ギリシャからの移住者が多かったことを補足しながら提示したい。このギリシャの文化が東方に広まった。ウェーブがかかった髪型や着衣の流れるようなひだの描き方や、仏の顔の表情が人間的であることなどに気付かせ、発表させたい¹⁰⁾。

この東京書籍の歴史教科書の中で注目された彫刻制作技術・意匠の東漸は、古代の西洋文明の成果がインドの北側のガンダーラを経由して中国および日本に影響を及ぼしたという点で中学生には興味深く見ることが期待されている。

かかる彫刻制作技術・意匠の東漸については、2003年に東京国立博物館と兵庫県立美術館で開催された「アレクサンドロス大王と東西文明の交流展」の図録の中に掲載された田辺勝美「ギリシャから日本へ」の解説記事が詳しい¹¹⁾。その中で田辺は、ギリシャ神話の登場人物等の意匠の東漸の例を数多く挙げているが、中でも俵屋宗達、酒井抱一らの風神雷神図の中の風神の源流がギリシャの北風のボレアス神、毘沙門天（多聞天）と大黒天の源流がギリシャのヘルメス神、執金剛神の源流がギリシャの英雄ヘラクレスであることを紹介している¹²⁾。

従って、東京書籍版の中学校歴史教科書は、かかる彫刻制作技術・意匠の東漸という歴史事象がその書の殊勝な独自性を示すし、またその歴史事象を説明するための古代ギリシャの彫刻作品の代表例として「ミロのビーナス」を取り上げたわけである。それゆえ、その「ミロのビーナス」像の掲載はそれ自体非常に重要な意味を含んでいるのである。

Ⅱ ミロのビーナスの代わりにラオコーン群像を用いてはどうか

次に、疑問の2点目であるが、東京書籍版の中学歴史教科書の中ではその「ミロのビーナス」像は、それを掲載するページ中のガンダーラの仏像だけではなく、さらには「第3節 古代国家の歩みと東アジア世界」の「1 聖徳太子の政治改革」の単元の中で扱われるアジャンタ石窟壁画と法隆寺金堂壁画の対写真、中国の竜門の石仏と法隆寺の釈迦如来像の対写真、韓国の弥勒菩薩像と広隆寺の弥勒菩薩像の対写真（39頁）との関連からギリシャ起源の文化の東漸を示すものとされている。それゆえ、問題の教科書の殊勝な特徴であるギリシャ起源の文化の東漸を叙述する際にはそのギリシャ文化の代表作として何を中学生に提示するかという問題が大きな意味を有することになる。

他方で、「ミロのビーナス」像は上記のⅠの考察の中で述べたように、山川出版社版の世界史教科書にも写真入りで登場しているので、内容が重複する。高校でも教科書に掲載されているものをわざわざ中学校の教科書に盛り込む意義はあるのであろうか。この点について筆者は、そのビーナス像の代わりに同じくヘレニズム時代の彫刻作品の傑作である「ラオコーン群像」を用いることを提案したい。以下、その理由を述べたい。

第一の理由は、古代ローマ帝国時代の著述家プリニウスの『博物誌』の中にラオコーン群像に関する記述があることである。それは『博物誌』36巻37章の中にある。以下にその当該箇所を和訳を引用する。

共同でつくられた作品その他 これらの人々以外には有名な人はあまりいない。ある人の作品が著名なものであったとしても、ただひとつの作品に共同した芸術家が何人もあったため、その人の名声はぼやけてしまう。というのは誰でも個人として名声を独り占めにすることはできないし、またその何人かが同時に名を挙げることはできないからである。その例はティトゥス帝の宮殿にある『ラオコオン』だ。これはどんな絵画にも、どんな青銅作品にも勝る作品である。ラオコオン、その子供たち、そしてすばらしいヘビの絡みつき、これらはいずれもロードス人であるハゲサンドロス、ポリュドロス、そしてアテノドロスの卓越した工芸家たちが、一致したプランに従って、一個の石塊から刻んだものである。

プリニウス『博物誌』36巻37章（中野定雄他訳）¹³⁾

その中でラオコーン群像は、当時、ティトゥス帝（在位79－81年）の邸宅にあるとされているし、そしてギリシャのロードス島の彫刻家3人の共同制作とされている。その彫刻家3人のハゲサンドロス、ポリュドロス、アテノドロスについて、セッティスは、3人の中で最も有名であったアテノドロスを中心として前42年以降の時期にイタリアに移住し、イタリアの地の工房においてラオコーン群像が制作されたに違いないと述べ、他の研究者たちによってその制作時期につ

いて前40～20年頃と主張されていると述べる¹⁴⁾。ラオコーン群像はローマ帝国の時代にローマ皇帝の邸宅におかれていたのであるから、この点でラオコーン群像は、教科書の同じ単元の中の「ローマ帝国」と大きく関わる。

第二に、現存するラオコーン群像は、1506年1月14日にローマのブドウ畑で発見され、現地に派遣されたジュリアーノ・ダ・サンガッロによってかつてプリニウスが言及したラオコーン像と同定されたこと、また彼にはイタリアのルネサンスの巨匠ミケランジェロが同行していたことがサンガッロの息子の手紙から知られている¹⁵⁾。

ここでサンガッロの息子の手紙の一部の和訳を引用してみよう。

この上なく敬愛すべき枢機卿様

私がフィレンツェの古代彫刻に関して得ている情報とは、以下のごときものです。私が初めてローマに来てまだ何年も経ってない時のことです。教皇に、聖マリア・マッジョーレ教会の近くにある葡萄畑でとても見事な彫像が発見された、との報告が寄せられました。教皇は馬丁に「ジュリアーノ・ダ・サンガッロの家に行き、すぐ現場に向かうように伝えなさい」と命令しました。こうして一同は皆現場に赴いたのです。というのも、ミケラニョロ・ボナローティ [ミケランジェロのこと] はしばしば家に出入りしていたからです。これは私の父が彼を呼び招き、彼に教皇の墓を作る仕事を任せていたためでしたが、父は彼もまた現場に向かうことを望んだのです。そして私も父に連なり、同行したのです。彫刻のある場所に降りました。すぐに父は言いました。「これはプリニウスの言っているラオコーンだ。」そして人々は穴を大きくし、外に出すことができるようにしました。

視察を終えると、私たちは食事のために帰宅し、古代美術品について語り、フィレンツェの古代美術品にまで話が及びました。[中略]

一五六七年二月二八日、自宅にて貴下のフランチェスコ・ダ・サンガッロより。

(芳賀京子、日向太郎訳) ¹⁶⁾

上記に引用された手紙からラオコーン群像の発見時にジュリアーノ・ダ・サンガッロによってその像がかつてプリニウスが言及したラオコーン像と同定されたこと、また彼にはイタリアのルネサンスの巨匠ミケランジェロが同行していたことが分かる。

従って、この点でラオコーン群像はイタリア・ルネサンスおよびその時代の巨匠ミケランジェロと関わりを有することになる。それゆえ、このラオコーン群像と教科書との間では本像が教科書の単元「キリスト教世界とルネサンス」(100-101頁)と、さらにはミケランジェロとの関わりから写真図版「ミケランジェロの「ダビデ」」(101頁)と大きく関わることになる。かかる理由から、ラオコ

ーン群像はより一層この教科書にふさわしいといえる。

第三に、東京書籍版教科書『新編 新しい社会 歴史』の単元「ギリシャ・ローマ文明」の中に掲載の地図「古代ギリシャ人の交易活動」(28頁)の中には「トロヤ」の地名が記載されている。それゆえ、教科書の執筆陣はあらかじめこの単元でトロヤ戦争の神話を中学校社会科教師に教材として提供することを意図したのであろう。だが、教科書の本単元中の記載内容の中には他にトロヤ戦争に関連する事物が皆無である。他方、「ラオコーン群像」は、周知のとおり、まさにトロヤ戦争神話の一主題である。それゆえ、教科書に添えられた歴史地図の面からもラオコーン群像はふさわしい教材であるといえる。

第四に、「ラオコーン群像」は、その様式美の面からいっても、前述のギリシャ起源の文化の東漸を示すものとして不足はないといえるのではなからうか。

以上のことから「ラオコーン群像」は東京書籍版『新編 新しい社会 歴史』の教科書の中では、それ自体がギリシャ文化の代表作であるし、また同じギリシャ文化の題材のトロヤ(戦争)と関連するし、他方では時間軸上でプリニウスの叙述を通してローマ帝国と、そしてミケランジェロを通してイタリア・ルネサンスと結びつき、また東西文明という水平面上ではギリシャ文化の東漸をもってアジアや日本とも結びつくことになる。

それに対して、それと同じくヘレニズム時代の傑作である「ミロのビーナス」は、それと同じ教科書の中ではギリシャ起源の文化の東漸を示す例とする以外に、それが掲載されている単元の内のみならず外でもそれに関連する事物が皆無である。また、そのビーナス像の発見場所の「ミロス島」の記載は、前述の東京書籍版教科書『新編 新しい社会 歴史』の中の地図「古代ギリシャ人の交易活動」(28頁)の中にはない。さらには東京書籍発行の地図帳である『新編 新しい社会 地図』の中のギリシャのキクラデス諸島周辺の地域を掲載している地図上にもない¹⁷⁾。

それゆえ、「ギリシャ・ローマ文明」の単元では「ミロのビーナス」像ではなく「ラオコーン群像」を用い、それを通してギリシャ文化の東漸、ローマ帝国、ルネサンス期イタリアのミケランジェロと関連づけることによって、ある時代の傑作が千年以上隔たった後世の時代や地理的に遠く隔たった他の社会と結びつきがあることを伝え、かかる意味合いからくる歴史の面白さを中学生に会得させることが最善であるといえるのではなからうか。

III 結び

東京書籍の中学校社会科歴史分野の教科書の『新編 新しい社会 歴史』の中に単元「ギリシャ・ローマ文明」が新たに設けられた。他方でイギリスの中学校段階にあたるカリキュラムの中に見られる、時代を読む感覚を育てるために時代・社会に特有の諸特徴を比較させる手法は注目されるべきものである。そのような中でその東京書籍版の歴史的分野の教科書の単元「ギリシャ・ローマ文明」

が彫刻制作の技術・意匠の東漸を紹介してギリシャ・ローマ文明の一要素がアジア・日本に影響を与えたことをその内容の一部としていることは非常に意義があると思われる。

けれどもその際、東京書籍版の教科書が「ギリシャ・ローマ文明」の彫刻作品の代表として写真を用いて紹介しているのは「ミロのビーナス」像である。だが、この像は、高校の世界史の授業において多く採用されているといわれている山川出版社『詳説 世界史B』の教科書の中にも写真付きで登場しているので、この教科書を用いる高校生にとっては内容が重複する。それに対して、中学校において「ギリシャ・ローマ文明」の東漸を教える際に「ミロのビーナス」の代わりに「ラオコーン群像」を用いるならば、その像が古代ローマ皇帝の邸宅にあったことが当時のローマ知識人によって記録されていたことや、ルネサンス期のローマで発掘されてミケランジェロが発見現場を訪れたことから、その像の使用が、文明の東漸だけでなく、その単元「ギリシャ・ローマ文明」やイタリア・ルネサンスの単元とも関連することから、「ラオコーン群像」が教材として非常に適切であることになろう。それゆえ、筆者は、東京書籍版の教科書の「ギリシャ・ローマ文明」の単元では「ラオコーン群像」を教材にして教授することを推奨したい。

註

(1) 坂上康俊，戸波江二，矢ヶ崎典隆他『新編 新しい社会 歴史』（東京書籍，2016年）。

(2) 五味文彦，戸波江二，矢ヶ崎典隆他『新しい社会 歴史』（東京書籍，2012年）。

(3) http://www.rgs.org/NR/rdonlyres/BAAA2085-2E7E-4B0F-B6B4-13F715630293/0/FW_HistoryNC.pdf（2007年版）の112頁。現在、イングランドでは2013年9月に公刊されたNational curriculum in England: history programmes of studyがある（<https://www.gov.uk/government/publications/national-curriculum-in-england-history-programmes-of-study/national-curriculum-in-england-history-programmes-of-study>）。

(4) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』（日本文教出版，2008年）142－143頁。

(5) たしかに前掲の『中学校学習指導要領解説 社会編』の中の解説記事の中では歴史的分野の「1 目標」の中の「(1)」の「我が国の歴史の大きな流れを（中略）各時代の特色を踏まえて理解させ」ることに関連して「政治の展開，産業の発達，社会の様子，文化の特色など他の時代との共通点や相違点に着目して各時代の特色を明らかに」することに言及しているし（67頁），また「2 内容」の中の「(1)歴史のとらえ方」の中の「ウ」の中で「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して，各時代の特色をとらえさせる。」と，

さらに「内容の取扱い」として「ウについては、(中略)各時代の学習のまとめ(中略)の際、各時代の学習の初めにその特色の究明に向けた課題意識を育成した上で、他の時代との共通点や相違点に着目しながら、(中略)各時代の特色をとらえさせる」とあり(71頁)、各時代の特色について他の時代との比較の観点があるようである。だが、上記の「内容の取扱い」の中にある「各時代の学習の初めにその特色の究明に向けた課題意識を育成」について前掲書の解説では、そのための学習の動機付けとして「例えば、生徒がもっているその時代のイメージを表現させたり、前の時代との違いを予想させたりすることなどが考えられる。」とされており(72頁)、それゆえ、わが国の歴史教育が通史を採っていることから生徒に「各時代の特色をとらえさせる」ことの目的が次の時代の学習のための予備的手段となっているようである。従って、こういうふうに各時代の特色を踏まえさせることは、必ずしもイギリスの歴史カリキュラムの中に見られるように、生徒によってとらえられた、時代の諸特色の間の関係を述べたり分析したりすることに至る必要はないように見受けられる。

(6) D.C. Perkins & E.J. Perkins eds., *Victorian Britain: A Master File*, Swansea, 1995, rev. 2001, p. 88の“Education”やH. Foote & J. Keys, *Victorian Britain*, Nuneaton, 1998, rpt. 1999, p. 18の“Schooling - Then and Now”を参照せよ。

(7) 木村靖二、佐藤次高、岸本美緒他『詳説 世界史B』(山川出版社、2015年)。

(8) 東京書籍の中学校歴史の教科書28頁の左下に掲載された「古代オリンピック」の記事に添えられている陶器絵について説明する。円盤投擲者(ディスクボロス[δισκοβόλος, diskobolos])と呼ばれ、円盤[δίσκος, diskos]を投げる[βάλλειν, ballein]人の意)が描かれているが、彼の左側にある左右一対の道具は、ハルテレス(ἄλτηρες, haltêres, 単数形はハルテル[haltêr])と呼ばれる幅跳び競技用の垂鈴である。現存のものの中には石製のものと青銅製のものがある(S.G. Miller, *Ancient Greek Athletics*, New Haven & London, 2004, p. 64-65)。これは跳ぶ際に両手に持つようにして使用される。幅跳びはハルマ(ἄλμα, halma)と呼ばれ、バテル(βατήρ, batêr)という踏切板と考えられているものから跳躍する(Miller, *op. cit.*, p. 63-64)。跳躍後の着地点はスカンマ(σκάμμα, skamma)と呼ばれる、地面の掘り返されたところである(Miller, *op. cit.*, p. 66)。このスカンマを用意するために地面を掘り返す道具がつるはしであり(Miller, *op. cit.*, p. 66 & Fig. 121)、これが教科書の陶器絵の中の円盤投擲者の足元に描かれている。跳躍の際にハルテレスが使われるが、その使い方は、複数の陶器絵を参照したミラーの復元によると、跳躍者はまず右足を後ろに下げてその膝を曲げてその足に体重を乗せてハルテレスを自身の前方の肩くらいの高さに腕を伸ばした状態で持ち上げてスタートのポーズを取り、笛吹の演奏でタイミングをとってから走り始め、バテルのところで跳躍をするが、跳躍

の時に下方に位置取りさせていたハルテレスを前方かつ斜め上の方に振り上げるようにするために、伸ばした腕のひじから下の部位を前方に曲げるようにしてハルテレスを移動させ、その振り上げられたハルテレスの反動を利用して高く跳べるようにし、次の空中では腹部の前あたりに位置したハルテレスを、前方に腕を伸ばすことによって、前の方に突き出して長い距離を跳べるようにし、そして着地に近づいたら両腕を後ろの方に振り下げてさらに長い距離を飛べるようにし、最後に着地直前にハルテレスを自身の後ろ側で手放して身体の重量を軽くしてさらに距離を稼ぐ工夫をするというものである（Miller, *op. cit.*, p. 66-68. また Miller, *op. cit.*, p. 67の中には跳躍の一連の動作の復元図〔Fig. 129〕がある）。

参考までにハルテレスの形状を説明する。ハルテレスの形状を知るには、芳賀京子監修『古代ギリシャー時空を超えた旅一』〔展覧会図録〕（朝日新聞社他発行、2016年）に掲載の写真が有用である。芳賀、前掲書、273頁の中の「268 ハルテレス」の写真の中のハルテレスは、「カルキディケ地方、古代ディカイアの墓地出土」で「ポリュギュロス考古博物館」所蔵の「前500～前450年」のものとされる。このハルテレスの形状は、「鉛」で作製されているが、「競技者の手になじむよう中央がくぼんだ半円状」である。握りの箇所は長方形に近い板状であるが、おそらくは親指で握る側が曲線になっているのに対して残りの指で握る側が直線的になっており、その両端が270度の弧を描く形状になっている。それゆえに曲線側を目でたどると上記のように「半円状」に見える。他方、芳賀、前掲書、272頁の中の「266 ハルテレス」の写真の中のハルテレス（「古代オリンピアの競技場出土」で「オリンピア、オリンピック歴史博物館」所蔵の「前5世紀」のもの）と「267 ハルテレス」の写真の中のハルテレス（「古代オリンピア、アルティス出土」で「オリンピア、オリンピック歴史博物館」所蔵の「前5世紀」のもの）は両方とも石製で、形状が横から見れば楕円形を半分にしたような、半円状ではあるが片端がやや長く伸びているような形をしているし、また端が長く伸びていない側の方に、握りをよくするために穴が開いているのが特徴的である。

(9) 「ミロのビーナス」像について新編新しい社会編集委員会、東京書籍株式会社編集部編『新編 新しい社会 歴史 教師用指導書 指導展開編』（東京書籍、2016年）135頁の「資料解説」の中ではその像が「1825年にエーゲ海南部のミロ島で発見された」と述べられているが、「ミロ島」の「ミロ」はフランス語読みであることから、現代ギリシャ語に基づく「ミロス」(Μηλος) 島とするのが適切であろう。

(10) 新編新しい社会編集委員会他編、前掲書、135頁。

(11) 田辺勝美「ギリシャから日本へ」（東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション編図録『アレクサンドロス大王と東西文明の交流展』〔2003年〕所収）、12-18頁。

(12) 田辺、前掲書、15-18頁。

(13) プリニウス著、中野定雄、中野里美、中野美代訳『プリニウスの博物

誌 III』(雄山閣, 1986年) 1459頁。

(14) S. セッティス著, 芳賀京子, 日向太郎訳『ラオコーン 名声と様式』(三元社, 2006年) 65頁。ただしセッティス, 前掲書, 65頁の中では3人の彫刻家のうちの「アテノドロス」が「アタノドロス」と表記されている。表記の確認のためにLoeb版のD.E. Eichholz, *Pliny Natural History with an English Translation in Ten Volumes Vol. X Libri XXXVI-XXXVII*, Cambridge, Massachusetts, 1962, rpt. 1971, p. 30-31を閲覧したところ「アテノドロス」が正しい。

(15) セッテッス, 前掲書, 150-152頁。なお筆者がローマでのラオコーン群像の発見時にミケランジェロが立ち会っており, その後彼がそのスケッチを描いたことを知ったのは, 他大学のヨーロッパ文化史に関する講義の中で英文テキストを使用するつもりでティーン向けの書であるR. Matthews, *The Renaissance*, New York, 2000, p. 9を読んだことである。

(16) セッテッス, 前掲書, 150-152頁。

(17) 矢ヶ崎典隆他『新編 新しい社会 地図』(東京書籍, 2016年)。その39-40頁の「ヨーロッパ」の地図上にも33-34頁の「西アジア・環地中海」の地図上にも「ミロス島」の記載がない。

〔付記〕

本稿は, 長崎大学教育学部と附属小・中学校の共同研究「社会科学研究の成果を生かした社会科学習素材の発掘及びその教材化の研究」(研究代表者 福田正弘)の活動の成果の一部である。